

Title	石原忠男著 恐慌の経済理論
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.3 (1961. 3) ,p.245(87)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610301-0089
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、なにを問題とすべきか、それにはどうい
う解答が用意されなくてはならないかを、い
ささかせんさく好きな哲学者流の論理を凝ら
して書かれてある。国民所得の実際の計算法
や社会会計の様式の発展を追うのに忙しい現
状では、こうした国民所得論をふりかえるこ
とは、きわめて大切だとかんがえる。

鈴木教授の著書は山田教授の著者から哲学
の衣裳をはぎとり、実践的なエンジニアの服
に着替えさせたようなものだ。国民所得概念
に関するかぎり内容は大同小異だが、国民所
得を中心とする種々の計測への手がかりを与
えてくれているのが新しい。ファレルの生産
函数が詳説され、産業連関表がやつつけられ
るなど、教科書としてひかえ目ながら、今回
も教授独自の見解が顔を出している。

大川教授が企画研究所陣を擁して編集さ
れた著作は、よく書けている部分とそうでな
い部分とまざっているが、しかし、日本の国
民所得統計がどう作られ、どこに問題点があ
るかは、きわめて精細に書かれていて非常に
役立つ。またそれを使って日本経済の長期・
短期の分析を試みており、経済白書が日本経
済を一年々々で刻んでしまっているのに対
し、手法は同じながら新たな経済展望をわれ

われに示してくれるものである。(山田「国
民所得論」岩波書店・A5・三四八頁・六五
〇円、鈴木「国民所得の基礎理論」泉文堂・
B6・二三四頁・二二〇円、大川編「国民所
得」春秋社・B6・二六二頁・四八〇円)

—大熊一郎—

グリーン編

『プロテスタントリズムと
資本主義』

周知の如く、プロテスタントの信仰は一つ
の新しい観念体系として、すべての伝統的価
値を切崩していった。イギリスにおいてこの
戦いを押進めたのはピューリタンで、その基
底には、恩寵だけが人を救うことができ、し
かもこの恩寵は地上のいかなる制度によつて
も仲介されることのない神の直接の賜物であ
るとする固い信念があった。従つてこの救済
の賜物を自由に手に入れようと思えば、自覚
に満ちた人にふさわしい超人的な精力をもつ
て実践運動に飛込まなければならない。職業
と禁欲に徹し、独立独歩することが望ましい
のである。トニーによれば、旧秩序に抗し

て近代イギリスを生み出した力は、そうした
人々の間にはぐくまれていった。このための
立論の基礎をトニーは、カルヴィニズムが
資本主義の発展に決定的な意義を有したとす
るウェーバーから学んだ。ウェーバーの主張
は、ゾンバルトが資本主義の発展要因として
資本主義精神の重要性を指摘して以来、資本
主義精神の起源をめぐる問題として、彼の著
「プロテスタントリズムの倫理と資本主義の精
神」のなかで展開された。このことによりウ
ェーバーは、宗教と資本主義の勃興の関係を
めぐる問題で、問題の提起者となり、この問
題が議論されるたびに引合いに出されるにい
たつた。ときには激しい批判の焦点に立たさ
れることもあった。

ウェーバーの主張をめぐり具体的にどうい
った議論が展開されて来たか。本書はその経
過を初学者に示すべく編集されたものである。
この目的を達するため、本書では、論争に
参加した諸学者の論述からの抜萃を一読させ
るといふ手法がとられている。抜萃は要を得
ており、専門家にも便利な書物となっている。
冒頭には、当然のこととして、ウェーバーから
の引用がある。しかし簡単を極める。続いて
は、ウェーバーの主張を、神学者フランドンの

ある。「恐慌を「剰余価値法則の側面からみる
と、過少消費説」となり、価値法則の側面から
みると「不比例説」となる。……それらがい
れも一面的な理解であるのは、基本的矛盾の
一側面だけをみて他面をみないからである」
(二〇三頁)という。従来お題目のようにとな
えられがちであった「基本的矛盾」に積極的
な説明を与えようとしてされていることには敬意
を表すべきであるが、剰余価値法則が資本主
義の基本的経済法則である(二二三頁)としな
がら、何故この基本的経済法則たる剰余価値
法則から説明することが一面的な理解となる
のであろうか? 剰余価値法則と価値法則と
を対立させておくこともまた極めて疑問とい
わねばならない。この点、要するに「価値法
則」の理解の仕方にかかわる問題であるよう
である。その他の諸論議の連関についても、
疑問と思われる論述、トートロジー的「説明」
がみられるが、経済学的基础範疇・諸概念が恐
慌の研究と如何に全般的に関連してくるかを
示すものとして、研究サークルなどで集团的
に使用するならば、豊富な討論の素材を提供
するであろう。(未来社刊・A5・三一頁
・定価五八〇円)

筆によって、その概要を理解させる。本論とい
わるべき部分では、トレルチ、ゾンバルト、ト
ーニー、ハドソン、セー、ロバートソン、フ
ンファニ、イーマの著作からの抜萃が収めら
れている。これら論者がウェーバーに対して
どういった姿勢を示したか。問題はそこにあ
るわけであるが、その要点はXページからX
ページの論述から抜萃によって示そうと
するが、どれも敷衍すつ引用で簡単を極め
る。しかしよくその本質はついており、まず
論点の概要を理解させてからという構想であ
る。終りに、論争の経過を、フィッシュョフの
筆で語らせている。これはなかなか便利な一
文である。Robert W. Green (Ed.), Pro-
testantism and Capitalism. The Weber
Thesis and Its Critics. (Boston: D. C.
Heath and Company, 1959. Pp. XII+116.)

—渡辺国広—

石原忠男著
『恐慌の経済理論』

本書は、多年にわたって恐慌に関する理論

新刊紹介